

# 新渡戸稲造の農業思想

——ドイツ経済思想の影響と『農業本論』——

谷 口 稔

## I. はじめに

新渡戸稲造（1862-1933）は「思想」「教育」の分野で数多くの著作を残しているが、最初の研究分野は農学であった。新渡戸は農学を志して札幌農学校に学び、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学を経て、ドイツのボン、ベルリン、ハレ大学で学んだ。1890年、コンラートの指導の下でまとめられた学位論文<sup>1)</sup>が *Über den Japanischen Grundbesitz, dessen Verteilung und landwirtschaftliche Verwertung*. (日本の土地所有、その分割および農業経済的利用について)、副題—*Eine historische und statistische Studie*. (歴史のおよび統計的研究)である(日本語のタイトルは『日本土地制度論』)。帰国後、札幌農学校教授の任を経て書かれたのが『農業本論』(1898年刊)で、『農業発達史』も同年に出版されている。農業論に関する著作は、上記の3冊をもって代表させることができる。

その中でも『農業本論』は新渡戸の名著の一つとされ、近代日本において社会科学的観点から農業を検討した著作であった。出版時、農学分野に限らず幅広い読者層の関心を集めたためベストセラーとなり、戦後、農山漁村文化協会編『明治大正農政経済名著集』の第7巻(1976年刊)に収められている。『農業本論』は出版時より、好意的あるいは批判的な書評が錯綜し、たとえば徳富蘇峰が「寛容博厚の精神的調子を以て満たされている」<sup>2)</sup>と賞賛し、横井時敬は

「新渡戸の農学は雑然的で非系統的」<sup>3)</sup>、河上肇は「新渡戸の貴農説は重農主義」<sup>4)</sup>と批判している。時代は下るが、東畑精一は「『農業本論』は読む者をして農学に志さんと追い立てる」<sup>5)</sup>と肯定的評価をしている。定説となっているのは蓮見音彦の見解で、「新渡戸の農業論は中間的であり、一つの方針が貫徹されておらず、その後の日本の農村研究に果たした役割は必ずしも大きいとはいえない」<sup>6)</sup>というものである。今日でも新渡戸の『農業本論』は「常識的ではあるが中途半端」<sup>7)</sup>という論評がなされている。それは具体的政策、例えば、北海道への植民、小作問題等が論じられておらず、横井時敬の唱える「小農主義」「農本主義」に匹敵するスローガンも見受けられないため、漠然とした印象を与えるからであろう。新渡戸は当初「農政」の本を書く予定であり、したがって、『農業本論』はその前提となる本であったが、諸事情により「農政」の本は書かれずに終わった。中途半端という批判はこの本が「農政前提」という限定的な位置づけのもとで書かれたことに起因するものでもある。一般に総花的という評価を受けている『農業本論』であるが、本稿は新渡戸の真意をドイツ経済思想との関わりの中で検討していこうとするものである。

新渡戸は、1893年、自分が受けた札幌での教育を振り返って「札幌農学校はドイツで熱心に行われたカメラリストイック・サイエンス(官房学)の学校に類似している」<sup>8)</sup>と言ってい

る。そして、「ハレにおいては「農学」と「林学」, 「行政」と「政治」, 「経済学」に分解され、札幌ではそれが「農学」に集中した」と続く。新渡戸は自分が受けた札幌農学校の教育を官房学と受け止めており、独立した学としての「農学」の確立を目指していたと考えられる。

本稿ではまず、新渡戸が留学した時代の19世紀ドイツ経済思想の農学・農政学について触れ、その影響を受けて書かれた学位論文『日本土地制度論』において、新渡戸が明治維新以後の日本の農業をどう捉えていたのかを論じることとする。次に『農業本論』出版時の日本の農学・農政学の状況に言及し、最後に『農業本論』で展開された新渡戸の農業思想の特質及び農民倫理の確立について考察しようとするものである。

## II. 19世紀ドイツ経済思想の受容

新渡戸は『日本土地制度論』で、テューヤ、ミュラー、リスト、ロッシャー、シュモラー、ヴァーグナー、ゾンバルト等、19世紀の広範な経済学者、農政学者の文献を渉猟している。ここでは農業問題とそれに関する事柄に限定し、新渡戸に多大の影響を与えたテューヤ、ミュラー、リスト、シュモラーについて論ずることとする。

テューヤの業績の最大のものは「農学」という学問を独立の科学として成立させたことである。それまで農業問題は官房学という枠内で論じられており、官房学の関心は国家と御料地経営であった。強制耕作、労役、共有土地、他人の土地に於ける放牧権等が残滓として存在し、それらに反対したテューヤは、個々の農民は自分の土地を己が自由になし得るということから出発した。「テューヤは自ら「自由人」*homo liberalis*, すなわち自由な精神をもった人間であり、したがってまた、農民に一人残らず最高度の自由を得させたいと望んでいた<sup>9)</sup>」とハウスホーファーは述べている。テューヤは農業を植物性及び動物性物質の生産によって収益をあげ、貨幣の獲得を目的とする一つの営業と捉え

た。農業が独立した一つの分野と認められるためには、営利を生み出す必要があり、それ故、テューヤは農業における合理性を追求した。中世的な三圃式による強制耕作から輪作方式の導入、耕種と畜産との間の循環等、新たな方式による農業が実践に移された。テューヤの根本思想は、中世的領邦主義的なものから自由な新しい社会への夜明けを期するものであった<sup>10)</sup>。

次にミュラーであるが、彼は社会・経済の諸集団・諸人格が自由な競合を通して一定の調和的状态へと至るという自然法的・予定調和的な観念を重視した。「自由」への深い洞察がミュラーの特色であり、現在だけでなく、過去と未来を視野に入れて捉えるところにその独自性がある。「過去から未来へと受け継がれていくべきものは美しい不死の共同体であり、それは、言語、習慣、法律、制度、家族、世襲的土地所有という諸形態で存在する。過去・未来の不在世代の自由を尊重することは、ミュラーによれば、これらの諸形態をその「理念」とともに継承していくことを意味する。それを通じて現在の世代の一面的な自由の主張を緩和することにより、双方の自由が承認された理想的秩序が形成されるのである<sup>11)</sup>」。ミュラーは、マニファクチュアにおける単純労働では機械のような賃労働者に変質すると見ており、人格的な結びつきがあるツンフト制度の維持を唱えている。中世における領主と農民の間にも信頼に基づいた高貴で人格的な相互義務があったのであり、農民は領主への奉公義務が存在し、領主は農民を保護する義務を有していた。近代の市場経済はこの信頼関係を崩壊させ、社会のバランスを失わしめるものとミュラーは捉えた。経済体制を財だけでなく、精神世界をも含めて理解していた点にミュラーの特色があり、中世の人間関係において近代が失った信頼関係が存在していたと考えていた。

リストは後進国の経済発展は如何にあるべきかを分析した点で日本に多大の影響を与えた。彼は5段階の経済発展段階説を唱え、原始的未

開状態→牧畜状態→農業状態→農工業状態→農・工・商業状態と社会は進歩し、当時まだ後進国であったドイツを保護政策により第5段階の農工商状態に至らせることができるとした<sup>12)</sup>。一国の中で農業・工業・商業が均等的、かつ調和的に発達するのが最も望ましく、この場合においてこそ国民の規模における分業及び生産力の結合が行われて労働の生産性は高まると捉えていた。また、彼は精神面にも言及しており、「未開の農業にあつては、精神の鈍重、肉体の不器用、古い観念・習慣・風習・作業方法の固守、教養・福祉・自由の欠如が行きわたっている。これに反して工・商業国では、精神的及び物質的諸財の不断增加を求めて努力する精神、競争と自由との精神が特徴をなしている」<sup>13)</sup>と述べ、経済発展により精神面も開かれていくことを指摘している。

最後にシュモラーであるが、新渡戸はベルリン大学で彼の講義を聞き、直接に指導を受けた<sup>14)</sup>。シュモラーの自宅にも招かれ、人格的にも感化されるところがあり、後に「学徒の模範」<sup>15)</sup>というタイトルで回顧する文章を残している。

シュモラーは社会政策学会の中心的存在であり、農業の改善には知性に富んだ合理的農場主の存在と技術的・倫理的水準の高い農業労働者の人間変革が必要であると主張した。東エルベ地域の遅れた農村を近代的農業に転換させるには、ユンカーの広すぎる土地と劣悪な農業労働者の生活環境の改善が課題であった。ユンカーの下で農業労働者は農奴に近い劣悪な状態にあり、有能で自覚的な労働者は賃金の高い都市へ流出して行く傾向にあった。また、シュモラーは国際分業と同時に国内分業の必要性を説いており、工業化＝市場形成の観点から植民事業を提起し、東エルベの農民をドイツ工業の購買層になり得るように育てようとした<sup>16)</sup>。

新渡戸は「官房学」から「農学」を分離したテーヤからその合理主義精神を学び、ミュラーからは、農業の持つ精神世界の広がり和社会の人間関係のつながりを意識させられた。リスト

の農工商の均衡的発展は日本の取るべき道であり、日本は第3段階の農業状態から第4段階の農工業状態にあると認識し、シュモラーからは、農民の倫理の向上を教えられ、東エルベの遅れた地域の開拓の方法は北海道にも適用できるのではないかという示唆が与えられた<sup>17)</sup>。

### Ⅲ.『日本土地制度論』における新渡戸の日本農業理解

新渡戸は1887年から1890年までドイツで学び、ハレ大学に提出した学位論文が『日本土地制度論』である。ドイツ語で書かれ、ベルリンで出版されている。第Ⅰ部と第Ⅱ部に分かれ、第Ⅰ部は歴史的展望、第Ⅱ部は現代の土地所有における配分および利用状況が記されている。本書の冒頭では、日本の格言である「農は国の基」と、フリードリッヒ大王の「農業は人の営みの第一のものである。それなくして、商人も王侯も詩人も哲学者もありえない」という文を対比させている。また、マンチェスター学派に言及し、レッセフェールは楽天的(optimistisch)な考え方であり、零細農の困窮を放置することにつながると危惧している。そういう危機的状況に陥った場合、国家は人間愛と責任感から農業状況の改善を促す必要があると警鐘を鳴らしている。『日本土地制度論』は古代から1880年代までの日本の土地制度に焦点を当てて論じたものであるが、ここでは明治以降に限定して考察する。

新渡戸は明治政府の一連の農業政策に関して、農民解放という点では一定の評価を下しており、「中世以降農民ははじめて、自らの大地を耕し、今や彼らはそれを思いのままにすることができた」<sup>18)</sup>と述べている。しかし、明治政府の諸政策の中で、1873年の地租改正による金納化、1875年の地所の分割制限の廃止には疑義を呈している。金納化に関しては農民が生活資金を得るために収穫した米をできるだけ早く売ろうとし、自ら価格の低落を作り出しているという問題があった。地所の分割はより零細

化を招き、一層貧困に拍車をかけるものであった。新渡戸は、小土地所有とその細分化が家庭生活の破壊、健康状態の悪化をもたらすと危惧しており、「わが国の農民層は道徳的にも肉体的にも健全な状態にはない」<sup>19)</sup>と分析している。そして、根本的な問題としては、解放された農民の倫理観が十分に育っていないことを指摘し、次のように述べている。「従属していた立場から、急に自立した状況にあげられたことによって混乱し、夢にも思わなかった自由に眩惑されて、農民の多くは軽率に借金をし、その結果与えられた土地さえ失うことになった。このようにして多くの土地所有者は再び小作に転落した」<sup>20)</sup>。

明治政府の農業政策を「農民解放」という見地から評価しつつも、農民の実態の暗黒面に光をあて、将来的展望をもって改善がなされるべきであるというのが、『日本土地制度論』で示された見地であった。それではどのような政策をとるべきか、新渡戸が提起した農業政策は次の点である。

第1に、農業から他の産業にシフトすることで1人当たりの耕地面積を拡大することである。日本の平均耕地面積は0.8ヘクタールしかなく、経済的合理的な耕地面積と新渡戸が考える2ヘクタールを大幅に下回っていた<sup>21)</sup>。それではいかにすれば平均耕地面積を広げることができるであろうか。時間はかかるが人口の7割近くの農民が他の産業（工業、商業）へとシフトしていくことが、1人当たりの耕地面積の拡大につながると見ていた。日本のように国土面積が狭く人口が過密な国では、他の産業へ人口が移動することで農地面積も広がり、農工商のバランスを保った経済構造になると考えていた。この点はリストからの影響が大きいと思われる。

第2に、畜産の拡大である。宗教的・衛生的事情等から、日本では江戸時代まで牛肉、豚肉等を食用とすることはなかったが、明治になり肉食が普及したことで牧畜による食料増産への

道が開けてきた。幸いにも日本には多くの休耕地があり、そこを牧草地として活用する余地は十分にあった。畜産の奨励と休耕地利用はテーマから学んだテーマである。

第3に、山林の拡大である。これは上記の畜産とも関係するが、日本は豊富な森林資源を有効に活用してこなかった。森林を開発することによって、単に国内需要を満たすのみならず、輸出することも可能となる。その実現のためには国家は交通手段、つまり林道を建設することによって森林事業を根本的に改良しなければならないと提案している。

第4に、新渡戸が最も期待したのは北海道の開拓である。いくつかの農業政策を提起した新渡戸であったが、短期的には有効な解決策にならないと考えていた。新渡戸はドイツ留学中、北海道開拓が日本の将来を大きく左右すると捉えており、『日本土地制度論』を次の文で結んでいる。

「北海道（エゾ）こそ、旧日本<sup>22)</sup>における農業問題の具体的解決への途を私どもに示してくれるのである。（中略）ここにはいまだだれも思い浮かべなかった未利用の力が眠っている。そこへすぐに旧日本の生活の備えのない多数の人々が群れを成して移入し、新しい故郷と新しい共同体を作らさう。これこそが未来の国であり、そこに私どもの問題の具体的解決がある」

新渡戸はドイツを離れる際、東エルベ地方を視察しており、ドイツの国内植民政策に強い関心を持っていたことがわかる。遅れた農業のてこ入れというシュモラーの提起した課題、広く言えば、ドイツ歴史学派が抱えていた課題の解決方法を新渡戸は日本にも適用しようとしたのではないだろうか。

なお学位論文の続編として、プロイセンにおける国内植民を参考にして、北海道の開墾と植民について書く予定であったが、未完に終わった。その後、新渡戸は日本に帰国して札幌農学校教授として日本の農業政策を観察していく中で、最も重要な事は、農民の倫理性の向上であ

ることに気づかされた。農業の発展はまず人格の改良と考え、この精神面の部分をさらに深めて論じていったのが『農業本論』である<sup>23)</sup>。

#### Ⅳ.『農業本論』出版時の日本の農学・農政学

『農業本論』が出版された1898年以前の明治期の主要な農政関係の著書といえば、フェスカ、マイエット、エッゲルト等の外国人御雇の書物を除くと、横井時敬の『興農論策』（1891年）<sup>24)</sup>ぐらいである。『農業本論』が出版された後、横井は『農業経済学』（1901年）、河上肇は『日本尊農論』（1905年）、『日本農政学』（1906年）を刊行しており、明治30年代は日本の農学、農政学が誕生した時期であった。この時に登場した農政論は、江戸時代の農政論を踏まえながらも、西欧の経済学や社会科学を取り入れたという意味で近代科学的な政策論であった。

明治維新以後の日本の農業の進むべき道は、英米かドイツかで大きく二つの流れがあった。英米の農業は大規模農業という点では共通であるが、英国型は既存の農民層を分解し資本制大経営を目指したのに対し、米国型は開拓を重視し大規模経営を志向するものであった。他方、ドイツ型は従来の農民層を分解せず、小農民を主とするものであったため、当時の日本に受け入れられ易い面があった。明治政府は財政基盤が脆弱で地租に頼らざるを得ず、農村の分解を回避したいが故にドイツ型にシフトしていく。地主に保護を加え、徐々に工業化する道をとった日本は、経済学においてもイギリス流の自由主義経済学ではなくドイツ流の保護主義的経済学を導入していくことになり、農政学においてもドイツの保護主義的傾向の強い政策学が支配するに至った。

明治大正期にわたり我が国農政界に巨歩を印した横井時敬は、実学を重視し小農保護という観点をはっきりと打ち出した人物である。横井の言う「小農」とは、適正な規模を持つ自作農のことであり、具体的には「地主兼自作」であった。「大農」は、営利的、資本主義的経営を行

うのであるが、単位あたりの収穫は低く、小農は自己及び家族の労働を投下して勤労が直接収穫に反映されるが故に、効率のよい耕作を行うことができるというのが横井の持論であった。米国が大農経営を営むのは土地が広く人口少なきが故であり、「我国の如き国土狭くして、開墾すべき余地甚だ多からざる處に於ては、出来る丈け集約なる経営によって生産する必要がある」<sup>25)</sup>と説いている。横井は農本主義者と言われるが、それは次の文に明らかである。「農業は根本であり、商業は枝葉である。根本發育せざれば枝葉繁るべきでない。是れ東洋に於ける今昔よりの信念であった。独りそれのみではない。商業は都会に住居し、動もすれば勤労を厭ひて、奢侈を導き、社会人心を腐敗せしめ、国家の基礎を危殆ならしむるの患ありといふ。故に農を勧め、商を抑ゆる」<sup>26)</sup>と述べ、農民が強健で愛国心に富むが故に兵となるに適し、国防や社会の安定という観点からもできる限り多くの農民を維持する小農保護政策を提唱した。

河上肇は『日本尊農論』『日本農政論』を著しているが、両著は大学を卒業してまもなくの25,6歳の時の著作であった。河上は後に『貧乏物語』（1917年）を刊行し、社会問題へと傾斜していくが、出発点は農政、農業分野であった。『日本尊農論』では「健全なる国民経済の発達は、農工商の三者をして能く其の鼎立の勢を保たしむるに在りとは、余輩の確信して疑わざる所なり」<sup>27)</sup>とリストの農工商鼎立論を支持している。

この時期の日本はロシアを破り空前の勢時に邁進し国威発揚していたが、それは工商偏重をあり、農業を頹廢させる危険性を孕んでいた。河上はそういう時代の流れに抗して農業を軽視すべきでないという持論を展開したことになる。『日本農政学』では農業の理想と現実が語られ、いかなる政策をとるべきかが論じられている。日本の農業が世界に遅れをとらないためには、農業生産を極大化し、農業生産費を極小化する合理的農業を展開する必要があるとして、土地、資本、労働の3要素を以て日本農業

を分析している。わが国の土地は開墾の余地が乏しく、資本の農業への投下は多くは望めず、農業労働者も不足するであろうと予測した<sup>28)</sup>。それゆえ、農工商鼎立を保つためには農業保護政策を行う必要があったが、河上は、関税を高くして国内農業を守るのではなく、生産の合理化、農業保険制度、租税対策、農民団体の組織化等を通して小農を守ろうとした。河上の議論は農本主義に通じる面を持っていたが、横井の説く小農保護論、つまり農業は道德の基盤・強兵の基礎といった非経済的根拠を含む小農保護論とは、明確にその思考を異にしていた。しかしながら、横井、河上は、相互に異なる点を含みながらも、大勢としては急激に高まる「商工立論」の主張に対して抵抗する共同戦線を張っていたとも言える。

横井、河上との対比で、新渡戸の「貴農説」を俯瞰すると、その特質が明らかとなる。横井は実学的傾向が強く、農業が道德の基盤・強兵の基礎という認識はあるものの、農工商の精神世界の相互交流という視点は希薄であった。一方、河上も新渡戸の貴農説に対して、「農産物は日用の食料なるが故に貴重なりと云ふに過ぎざるが如し」<sup>29)</sup>と疑問を呈しており、新渡戸が強調している精神的意義には思いが至っていない。それに対し『農業本論』の世界は、農工商の精神世界の相互交流を重視し、農を行うことによる人間性の変革にまで視野を広げたものであった。『農業本論』は新たな学問領域を広げた先駆的著作であったと言える。新渡戸の農業論の特質は次の4点に集約できる。第1に、農業を軽視した国家は滅ぶという思想を持っていた点である。第2に、農工商の均衡的發展を望んでいた点である。第3に、農工商の物質的交流だけでなく、精神的交流という点にまで深めて理解した点である。第4に、農民の欠けた徳目を指摘し、農民倫理の確立を目指した点である。

## V. 『農業本論』における新渡戸の農業思想と農民倫理の希求

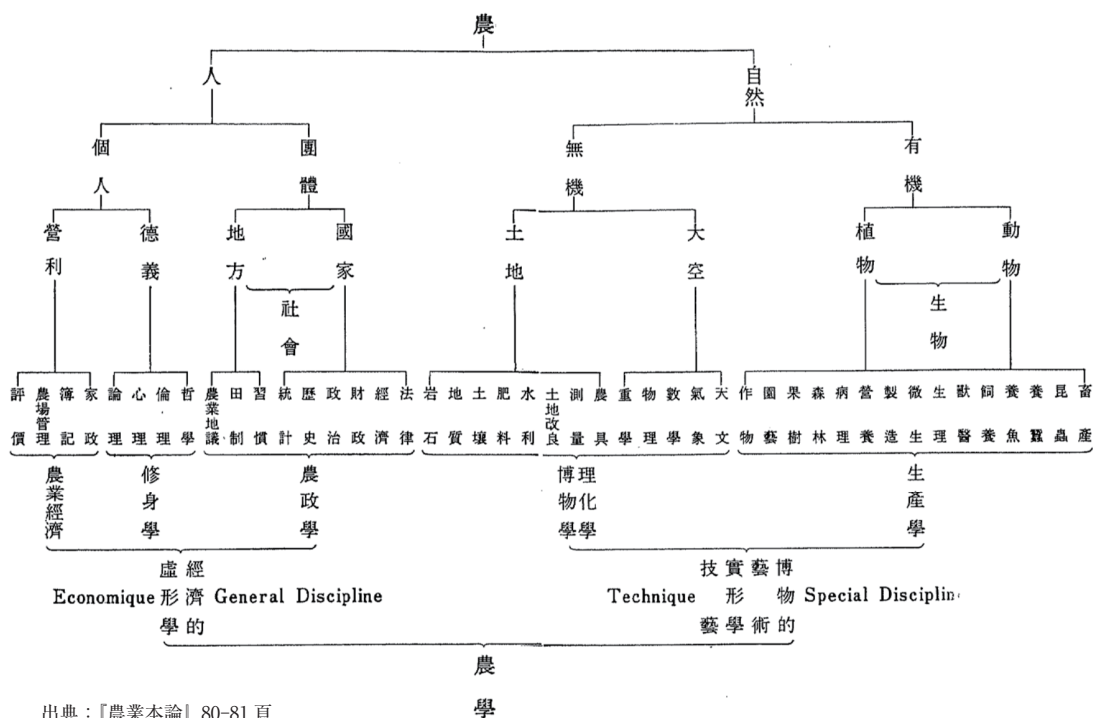
新渡戸は1891年に帰国後、札幌農学校教授になり、当時、存続が危ぶまれていた札幌農学校の立て直しに数年間尽力するのであるが、あまりの激務のために健康を害し、離職する。現職の時代から離職後にわたって断続的に書かれたのが『農業本論』である<sup>30)</sup>。この書には、日本の農業をつぶさに観察し、日本の農業の向かうべき道を探究した新渡戸の農業思想のエッセンスが盛り込まれている。

『農業本論』は、1章、農業の定義から始まり、2章、農学の範囲、3章、農業に於ける学理の応用、4章、農業の分類などの学理的な問題を扱った章と、5章、農業と国民の衛生、6章、農業と人口、7章、農業と風俗人情、8章、農民と政治思想、9章、農業、と地文、そして、10章の農業の貴重なる所以、とから構成されている。

第1章で新渡戸は農を定義するにあたり、テーヤの説を引用している。第2章では、農の範囲を右記の図で示し、新渡戸が壮大なスケールで農を捉えていたことがわかる。

農は自然を相手に人が行うものであり、人と自然との協同作業であるという認識が新渡戸にはあった。自然は有機と無機に分かれ、有機は動物と植物、無機は大空と土地に分類される。作物が育つためには、土壌が肥沃であることも大切であるが、(大空の)気象条件により大きく左右される。他方、人の方であるが、農民を個人として考えた場合と集合体として考えた場合(いわゆる社会を形成する場合)とに分類される。個人としての農民は、単に営利だけが目的で農業を行っているわけではなく、そこには哲学・倫理を含む徳義が背後に存在する。新渡戸が人格改良をしようとしたのは、まさにこの点であり、修身学的重要性はその意味で重要である。

農は、人と自然との協同作業であるという自然を重視する定義の仕方は、工業や商業とは異



出典：『農業本論』80-81頁

図 農の範圍

なるものである。農業は種を植えれば、そのあとは自然界の中で芽を出し、実をつけるように、自然の果たすべき役割が非常に大きい。しかし、工業では、原料となるもの（例えば綿花）は自然界の産物であるが、それを加工していく過程では、人工的、機械的作業が中心となる。新渡戸が農業を他の産業に比して重要であると認識した背景には、自然界との協同作業という点にある。

以下、『農業本論』の中から4つの点に絞って論じる。

### 1. 貴農説<sup>31)</sup>

新渡戸の「農業が貴重である」との考えは『農業本論』の最後にある次の文にその真意が込められている。

「内に農の力を籍らずして外に商工によりてのみ勇飛せんとするは、恰も鳥が樹木岩石等の

間に一定の巢を構ふことなくして、渺茫たる海洋をば唯其両翼によりて飛翔するが如きのみ」<sup>32)</sup>

「農は万年を寿ぐ亀の如く、商工は千歳を祝ふ鶴に類す。即ち一は一定地にありて、堅く且つ永く守り、一は広く且つ高く翔つて、其勢力を示すものなり。故に此両者は相俟つて、始めて完全なる経済の発達を見るべく、而して後、理想的国家の隆盛を来すべきなり」<sup>33)</sup>

新渡戸は商工業にシフトしつつあった当時の日本にあって、農の貴重なる所以を説いたが、それには、いくつかの理由があった。

第1に、「農を主として工商を客として、三者の鼎立をはかる」<sup>34)</sup>という点である。新渡戸は、農業、工業、商業はあくまでも調和を保つべきと考えているが、「商工業の基礎は農産物を主とすることは忘るべからず」<sup>35)</sup>と三者の中でも特に農業の役割を強調している。新渡戸

が農業のみを重視する農本主義の立場をとらなかったのは、商工の発展のスピードが農よりも早く、国家の発展には商工の伸長が是非とも必要だからである。国が農業だけを主軸にして産業展開すると、飢饉などの時に海外から食料を輸入しようとしてもその費用も捻出できず、夥しい死者を出すことにつながる。新渡戸はその例として「支那」、「印度」、「露西亞」をあげている<sup>36)</sup>。

第2に、国家膨張<sup>37)</sup>と秩序・進歩のバランスという視点である。新渡戸は、国家が膨張、拡大していくには、商工業の力を借りる必要があると考えていた。農は万年を寿ぐ亀の如く…とは、農業は堅固に地中に生息する動物の如く安定しているが、その能力は決して外へ出ていくものではないとの意である。商工は千歳を祝ふ鶴に類す…とは、商工業は自国製品を国外に販売せんとして海外への飛躍を目指し、外に出ていくことを意味している。当時、ヨーロッパ諸国はもちろん、米国も膨張を始めていた。日本がこれらの海外諸国と駢馳して進歩できぬようであれば、政府が率先して膨張路線をとるように導くべきであると新渡戸は踏み込んだ議論をしている。他方、新渡戸の産業理解には秩序と進歩という観点も含まれていた。新渡戸は農業の使命を秩序に置き、商工業のそれを進歩に置いている。商工は動力である。「農は重力にして又静力たり、一は遠心力にして一は求心力たり、二者相提携して始めて円満なる完璧を成すを得べし」<sup>38)</sup>と理論的・哲学的に捉えていた。

第3に、「市場」という観点である。農民は都市の人々の食料を産出するだけでなく、都市で作られた製品の消費者としても重要である。「農民は、生産者として貴きのみならず、他業の産物の消費者として最も好良なる華客なり。何れの国に於ても、最良の購買者は内国人なり。(中略)農民貧ならば、則ち商工共に苦しみて、甚だしきは遂に恐慌を来さん」<sup>39)</sup>と市場という観点も重視していることがわかる。

第4に、穀を貴ぶの念である。当時の日本では約五千万石の米を生産しており、そのうち三千万石が日本人の食料になっていた(他の二千万石のうち、四百万石が酒造に回され、三百万石が菓子原料であった)<sup>40)</sup>。穀は永く人類の命脈となるがゆえに、農は貴重であると説いている。

最後に新渡戸が特に強調しているのが、農業の持つ精神的作用である。農業の持つ堅牢さ、地道さは人間性に与える影響が非常に大きい。新渡戸は、「農民と武士とは、剛毅木訥の親、身体労働の似且つ其技の巧緻を飾らざることなど、益兩者間に親愛の情を惹起せしむ」<sup>41)</sup>と精神的深みにおいて兩者の間に共通点があることを指摘している。農民と武士とは共に農村において尚武的社会を目指す点では同じであり、これに対して都市に住む商工は殖産的社会を目指す。新渡戸は捉えていた。武士が消滅した明治時代、新渡戸が理想とした武士道を担う層は農であり、商工ではなかった。新渡戸は尚武的社会の衰退が国家の精神的退廃を招くと認識しており、そういう意味でも、未だ倫理観を確立していない農民の自立が急務であった。

また、農村の尚武的社会と都市の殖産的社会は、相互に交流することによって一国全体としての繁栄をもたらすという視点もあった。一方では剛毅木訥なる者も、都市の知識人層と交わることにより視野が広がり、大局的観点から自分の仕事を見ることが可能となる。他方、都市住民が夏休みなどに農村に行き、農民と交流することにより、素朴さ、純朴さを回復することができる。新渡戸の農業、工業、商業の三足鼎立論は、市場形成のみならず、その精神面においても一国全体を俯瞰していたと言える。農工商の均衡は、物質的利益のみが優先されるならば実現不可能であり、精神的なものを視野に入れてはじめて可能となる。この精神面における産業理解は、ミューラーから大きな影響を受けていると思われる。

新渡戸は、社会の変革に関しては、フランス

革命のような急激な変化ではなく、イギリス流の漸進的進歩主義史観を高く評価していた。この点、農民の保守的な観念が時として急進化する都会の社会運動を緩和する作用をするとして、社会の安定という点から評価している。資本家と地主は、「共に相寄り相助けて、以て国家を維持する原動力をなし、一は軽進し他は保守し、甲は新思想を輸入し、乙は旧来の感念を持続し、以て政治の権衡を保つ」<sup>42)</sup>と述べており、新渡戸は農業は急激なる政治思想を調和する効あるものと見ていた。

## 2. 疎居と密居<sup>43)</sup>

農民は孤立して生活していくのではなく、人間同士の接触や社交が大切であると強調した点も新渡戸の農業思想の特質を見る上で欠かせない点である。一般に村落を形成するには、疎居と密居という2通りの方法がある。

疎居は、各自の畑の中に家があり、集落を形成しないで人が住む方法であり、密居は家々を一か所に集めて集落を形成する方法である。新渡戸は疎居と密居の双方に利点を認めつつも密居の側に立っている。機械を共同利用する時代には、密居は不可欠であり、疎居では農村の将来に展望が持てないと考えていた。これは生活面、実用面だけでなく、新渡戸の社交主義 (sociality)<sup>44)</sup> に繋がるものであった。新渡戸は、人は生きていく上で、神との垂直な関係 (vertical relationship) と同時に人間同士の水平的関係 (horizontal relationship) が重要であると考えており、これからの新しい時代は、社交性を以て人と接することが望ましいと見ていた。兎角、孤立しがちで視野を狭める傾向のある農民には社交性が是非とも必要で、社交主義は新渡戸の思想の根幹とも言えるものであった。

## 3. 予測的洞察という観点からの『農業本論』

新渡戸は『農業本論』を将来への警鐘という観点から論じている。

第1に、将来の人口予測である。当時 (1898年) の人口は15億人であり、年率0.8%の比率で人口が増加していくと、200年以内に60億人になると予測していた<sup>45)</sup>。しかし、それから120年も経たない現在 (2018年)、既に76億人を突破しているのであるから、新渡戸の予想をはるかに越えて人口増加は進んでいることになる。新渡戸は、ある程度、人類の叡智で食料危機は乗り越えることができると、やや楽観的な見方をしている。それは農業の機械化、肥料の改良などによってであるが、地力の消耗に関しては500年後には顕在化するかもしれないと述べている。新渡戸は将来のことを考えて地力を保ちながら農業をすることが人間に課せられた義務だと考えていた。『農業本論』4章及び9章<sup>46)</sup> は略奪農業、環境問題にも言及しており、自然環境を含めた農業という幅広い視点から見ていたことがわかる。

第2に、農の衰退は社会を病むという点である。最終章 (第10章) の結論のところでは新渡戸は「農の衰退は如何に社会を病ましむるか」ということを問題としている。『農業本論』と同じ年に刊行された本に『農業発達史』がある。この書のモチーフは「農を軽視する文明は滅ぶ」というもので、古代エジプト、ギリシャ、ローマがいかに農業を軽視して滅亡していったかが論じられている。ローマでは土地の兼併が小市民をして遊惰の民として放蕩に陥らせ、モラルが崩壊したことがローマ帝国の崩壊につながったと見ている<sup>47)</sup>。

第3に地方 (じかた) 学の尊重がある。明治以降、人口が農村から都市へと流れ、農村が過疎化し、農村の荒廃は惨憺たる状況をもたらした。農村には、その地方独自の考え方、産業振興の方法があるのであり、全国一律に一つの規格をあてはめるのは間違いである。新渡戸は、都市と農村とのバランスを考え、農村の研究をもっと幅広く行う必要があると考えていた。この地方学を究めずして地方の発展は望めないという新渡戸の精神を継承したのが、柳田國男で

ある。柳田は「学問が実用の僕となることを恥としない」<sup>48)</sup>という考え方をっており、現実社会の改良に資することを民俗学の目的とした。地方の衰退を食い止めるための学問という新渡戸の地方学の理想は、柳田に引き継がれたのであった。

#### 4. 日本の農民に欠けた徳目

新渡戸は『農業本論』を出版した2年後に有名な『武士道』を米国で発表している。武士道は日本人の道德観の根底にあり、日本人の思想形成に大きな影響を与えたものと新渡戸は考えていた。武士道の徳目の最高位に忠を置き、忠を支えるものとして、義と礼があり、義を支えるものとして、仁、勇、智の三本の鼎足があるとした。そして、礼を支えるものとして仁と誠を置いた。新渡戸の武士道の徳目の配置は、まず、底辺に、仁、勇、智、誠があり、その上に義と礼、そして最上層に忠の徳があるという、いわば三層構造になっていた<sup>49)</sup>。最終的に封建君主に対して忠義を尽くすことにより、武士は己の希求した名誉が得られたのである。新渡戸は武士道を高く評価しており、自己の理想に添った生き方を武士の中に見出し、武士道にキリスト教の精神に近いものを感じていた。それに対し、農民の倫理観はそれとは正反対で、欠けた面が大きくクローズアップされて新渡戸の目に映っていた。以下、『農業本論』の各章に散りばめられた徳目を抜き出して日本の農民にとって必要な徳目を論じることとする。

農民の徳目としてまずあげられるのは「勤勉」<sup>50)</sup>である。農業は自然に働きかけて作物を収穫するのであるから、絶えず一定不変の労働の投下が求められる。この点、牧畜社会と比べると、労働集約的な農業の方がはるかに稠密な目配りが要求される。「土地は耕耨(雑草をとる)の労に応じて、酬ゆるに収穫の多寡を以てす」<sup>51)</sup>とソクラテスは述べているが、これは勤勉を勧めたものに他ならない。また、この勤勉性は、作物の収穫だけにとどまらず、人間性の

涵養、養成にもつながり、家庭の形成、社会の維持として重要な働きを為している。つまり、人間が生存する倫理的ベースを農業は提供していることになる。しかしながら、自然界に働きかけて作物を得る農民には、収穫を期待できない農閑期が存在する。英米の農家では、冬間の農閑期を利用して教育に勉めるが故に、農民が文士となり、農の美を頌すということも可能であるが、一年の半ばが農閑期である北海道においては、賭博の盛んに行われるのは冬間であるというのが実態であった。それゆえ、農閑期には人間性を高めることに投資するという視点は是非とも必要であった。大地の中で働く農民は視野が狭くなりがちであるが、教養を身につけることにより、自分の生活を切り開いていくことができ、幅広い視点から自己を見つめることが可能となる。

次に「進取の気象」<sup>52)</sup>(新渡戸は「進取の気性」ではなく、「進取の気象」と記している)であるが、この徳目も日本の農民には大きく欠けているものであった。本来の農民は、一步一步、前進して生活を豊かにしていく努力をするものであるが、日本の農民は、着実と固陋とを混同し、没理想、没思慮で安閑と日を送っていると新渡戸は見ている。但し、この点は、農業にまつわる特殊性も考慮しないといけない。農業において品種改良の結果がわかるのは一年後であり、数年繰り返さないと定着した見解が得られない。いくらこれはいい品種だと勧められても、農民たちはリスクを冒してまでそちらの品種に移行したがりない傾向にある。進歩という概念から遠ざかり、今までの生活にしがみついている点は、日本のみならず他国の農民にも見られると新渡戸は言う。

そして「自由」である。『農業本論』第7章では、日本の農民の持っている自由とは、いわば、禽獣の自由であり、寝たい時に寝て、働きたい時に働くという自由であると述べている。これは孤立であり、孤立をもって自由と言はば、真の自由を理解したことにはならないと新渡戸

は言う。人間は社交的のものなれば、扶翼輔佐して世に処すべきであるというのが新渡戸の持論であった。そもそも、新渡戸は自由をどのように捉えていたのであろうか。

新渡戸は、論語にある「己の欲するところに従へども矩を越えず」の一句こそ自由の定義であると考えていた。然らば、矩とは何か。これは、外部と内部の二つに分けられる<sup>53)</sup>。外部とは法律、風俗習慣である。法律違反をすると罰が課され、風俗習慣を破ると周囲から排斥される。それでは、法律と風俗習慣さえ守っていれば自由であるかという、そうではない。法律、風俗に自分が納得できないところがあるにも拘わらずそれに服従していると、内部の自由が圧迫されるからである。例えば、キリスト教禁教令が施行されていた江戸時代に信仰を抱いた者は心の平安を得ることができなかったであろう。魂は身体より遥かに大なるものであると新渡戸は言う。「人には老若貴賤の区別なく神の如き何かが各自に宿っていることは、僕の堅く信ずる所であって、また何人も信じなくとも否定の出来ぬことであろう。そこでこの何ものかがあるいは勧めあるいは命じあるいは禁ずるものを僕は内部の矩といたい」<sup>54)</sup>

自由は、道徳的義務に基づく自己規律によってはじめて確保されるものであり、そのことによって単なる放縦から区別される。社会を構成する個々人の道徳的抑制の力が大きければ大きいほど人間と社会が享受できる自由の範囲はむしろ拡大する。興味深い議論として、新渡戸は、社会は「豆」の集合体ではなく「納豆」のように繋がっているものと考えたことである<sup>55)</sup>。この表現に新渡戸のいう「社交性」が関係している。この社交性の延長線上に、晩年、新渡戸が取り組んだ協同組合運動がある。

「勤勉」「進取の気象」「自由」を支えているもの、つまり、武士道の「仁」「誠」に相当するものとして、『農業本論』から次のことを汲みとることが可能である。まず、「仁」に相当するものであるが、旧約聖書の「落ち穂拾い」

に見られるように、貧しき民に対してある一定期間、拾う権利を認めた場合があったことである。古代においては農業生産物が主要な作物であったが、夫の戦死などで寡婦となった者をいかに共同体が支えていくか、そこに、「仁」の思想が見受けられる<sup>56)</sup>。

一方、土地の境界の争いは、古今を問わず、東西を問わず、必ず生ずる所である。これは「誠」と関係すると考えられる。境界間の争いは、昔時には宗教にて解決した場合がある。旧約聖書の「申命記」には、「その隣の地界を侵す者は呪われるべし」と記されている。ローマではテルミヌスという境界を守護する神が存在し、その位置を動かした一家は滅亡すると考えられていた。つまり、テルミヌス神を境界線に置くことで争いを回避したのである<sup>57)</sup>。土地の境界に関して厳格なルールが設けられていた点は、武士道でいう「誠」に相当する部分と思われる。

「勤勉」「進取の気象」「自由」と主体的な自我から派生する徳を中心に据え、そのベースとして「仁」「誠」を置いていたと想定されるが、最上位にくる徳としては、「宗教」<sup>58)</sup>を考えていたのではないだろうか。『農業本論』第7章には「農民が一たび屋舎を出て交わるところのものは悉く天地の作用であり、而してこの作用は人力の及ばぬところであり、そこで天を畏れる念が生じ、崇敬の念を起こさしめる」という表現がある。また、「農より起る利潤は、人より之を受けたるものにあらずして、元是れ天の賜」であるとも述べている。新渡戸は「宗教」を基督教に限定せず、普遍化された天という表現を使って、幅広い人に理解できるように配慮している。新渡戸が『農業本論』で言いたかったことは、自立した人間こそが社会を発展させるための不可欠の要件であるということであったが、それは日本の伝統思想においても可能であると新渡戸は考えていたと思われる。

## VI. 結 語

『農業本論』で示した「勤勉」「進取の気象」

は、新渡戸が留学していた19世紀のドイツが抱えていた課題でもあった。ドイツの発展は、労働者の勤勉と、有能な労働者を育成しようとする雇用主の存在にかかっているとシュモラーは捉えており、雇用主は、労働者のために教育制度を整え、有能な労働者を外国留学させたりするなど、生産効率の向上に努めなければならないと考えていた。シュモラーは「イギリスでは極めて有能かつ熟練した一人の労働者の仕事量がドイツ人の2~3人の労働力のそれに匹敵する」<sup>59)</sup>と述べている。

新渡戸は留学前、開拓使として北海道各地を訪問し、勤勉さに欠ける日本の下層社会の実態に接していた。日本の倫理的水準の低さを見るにつけ、その改善を図らねばならないという思いは常にあったと思われる。「勤勉」は、「人間の中で最も有益なる徳」としてウィリアム・ペンが記した11の徳目の1つに列挙されているものである<sup>60)</sup>。キリスト教では神に対する人間の応答として「勤勉」が位置づけられているが、それを信仰のない日本の農民にどう理解してもらえるのかが課題であった。そして、農業の進歩には最先端の農学の研究結果を受け止め、新しい品種改良に取り組む姿勢が必要である。そのためには農民が固陋、因循であってはならず、自らの人生を切り開いていく「進取の気象」という近代の人間の「徳」が求められる。ここにシュモラーの説く有能な労働者育成と重なり合う部分がある。

新渡戸はドイツ留学中、ボンで協同組合の活動に接している。19世紀の中頃、ライファイゼンはライン地方の村長として飢饉に苦しむ農民を救済するため、窮農救済組合を組織し、裕福な村民の協力を得て、長期低利融資の途を開いた<sup>61)</sup>。この協同組合の思想は、新渡戸の言う「社交性」・「自由」と関係すると思われる。しかし、新渡戸は1890年に記した『日本土地制度論』では、日本に協同組合制度を導入するには農民の「誠実さ」が欠けていると明言している<sup>62)</sup>。ドイツ留学時、新渡戸は、協同組合運動

がドイツにおいて著しい成功を収め、農民の経済的地位の向上に貢献している状況を見聞きし、日本への適応を考えてみたが、残念ながら、日本では組織は出来ても人間が出来ていない。それにはまず、人格修養の確立が必要と考えていたのである。新渡戸は精神的な人間と人間の連帯ということは早くから唱えていたが、資金を出し合って一つの事業を行う協同組合運動には慎重であった。しかし、その新渡戸も晩年の1931年、岩手県の産業組合中央会支会長に就任し、さらに1932年には、賀川豊彦と東京医療利用組合を設立したのである。ここにドイツ留学中とは異なる新渡戸の変化がうかがわれる。新渡戸は19世紀が競争の時代であったのに対し、20世紀は協調の時代であると考えていた。こうして見ると、新渡戸の農民倫理の理解、晩年の協同組合の展開は、いずれもドイツとは無関係ではなかったことがわかる。

『農業本論』は、多くの識者により「中間的」、「常識的ではあるが中途半端」、「農村社会に与えた影響は必ずしも大きくない」という評価を受けてきた。しかし、農業の持つ精神世界への学的領域の広がり及びその農業を担う農民の倫理性に焦点を当てた書と捉えるのであれば、現代にまで通じる課題を有していると考えられる。

## 注

- 1) ドイツ語原文は『新渡戸稲造全集』(以下『全集』と略)第2巻、教文館、2001年、726-824頁に所収(初版1969年)。日本語訳は『全集』第21巻、滝川義郎訳、5-150頁に所収。
- 2) 「国民新聞」1898年9月18日付。
- 3) 横井時敬『農業と農学』『横井博士全集』第3巻、大日本農會編纂、1924年、417頁(初出1917年)。
- 4) 河上肇『日本尊農論』『明治大正農政経済名著集』第3巻、農山漁村文化協会、1977年、246頁(初出1905年)。
- 5) 東畑精一「新渡戸稲造」『経済学大辞典Ⅲ』東洋経済新報社、1955年、311頁。
- 6) 蓮見音彦「新渡戸博士の農業論」『新渡戸稲造研究』春秋社、1969年、303-325頁。蓮見は『農業本論』を農業経済学として見るには、その中

- に異質なものの（人類学的、哲学的、社会学的、心理学的、宗教的等）を多く含んでおり、そのことも総花的となっている原因としている。
- 7) 原洋之介『「農」をどう捉えるか—市場原理主義と農業経済原論』書籍工房早山, 2006年, 66-67頁。
  - 8) 新渡戸稲造『札幌農学校』『全集』第21巻, 367頁（初出1893年）。
  - 9) ハウスホーファー著 三好正喜・祖田修訳『近代ドイツ農業史』未来社, 1973年, 27頁。
  - 10) 柏祐賢『農業の定礎者テーヤの生涯』富民協会, 1975年, 169頁。
  - 11) 原田哲史『アダム・ミュラー研究』ミネルヴァ書房, 2002年, 99頁。
  - 12) 小林昇『リスト 経済学の国民的体系』岩波書店, 1970年, 240頁。
  - 13) 同上, 258頁。
  - 14) 新渡戸は1888年10月から半年間、ベルリン大学でシュモラーに農業史を学んでいる。
  - 15) 「生徒の模範」『偉人群像』『全集』第5巻, 536-542頁（初出1931年）。
- 今日より五十年ばかり前、ドイツで起こった、歴史派なるものは、丁度我輩の学生時代には、経済学研究の最新の方法として尊重された。（中略）
- ベルリン大学に於けるシモレル（シュモラーのこと 筆者注）氏の講義は名文でもあり、南ドイツの訛はあつたにしても、その音声も朗かであり、それに講演中愛嬌たつぷりで、先生がにつこりする時などは、学生は知らずに拍手する有様であつた。それにベルリンの大学のこととて、聴衆の数も毎回数百にわたつた。同先生のごときは、経済学発展の歴史に、その名を永久に留めたものである。（中略）
- 親しくシモレル氏の書齋に先生を訪ねたことも五、六回あった。食事に招かれたことも三、四回はあった。その度毎に先生の為人の純なるところと、謙遜なる態度と、学問に忠実なる精神に触れることが出来て、今に同先生を思ふ時、心の底に感謝と敬虔の念を覚える。いつ行つても莞爾として学生を迎へ、質問があれば最も親切にこれを捉へ指導してくれた。
- 16) 田村信一『グスタフ・シュモラー研究』お茶の水書房, 1993年, 197-226頁。
  - 17) 新渡戸は1890年6月中旬、プロイセン東部を旅行し、植民事業を見学している。  
佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館, 2013年, 404頁。
  - 18) 『日本土地制度論』56頁。
  - 19) 同上, 138頁。
  - 20) 同上, 56頁。
  - 21) 『日本の農民解放』『全集』第21巻, 458-459頁（初出1891年）。

- 22) 明治政府は1869年に開拓使を置き、蝦夷を北海道と改称し、本格的な開拓に乗り出した。新渡戸はそれ以前の日本の領土を旧日本と呼んでいる。
- 23) 『農業本論』第7章のところで、Ländlich, sittlich!というドイツの諺を紹介しており、新渡戸は「田舎風こそ徳義風」と訳している。sittlichが徳を伴うという理解は『武士道』で述べた徳を連想させ、新渡戸の精神世界の一端がうかがわれる。
- 24) 『興農論策』は40頁ほどの書で、興農手段（農政は放任せず、干渉せず）、農学校、農事試験場、農会の4つの点から興農論を展開した（『横井博士全集』第3巻, 663-703頁所収）。
- 25) 横井時敬「農業の大小と国家との関係」『国家と農業』『横井博士全集』第8巻, 239-240頁（初出1906年）。
- 26) 横井時敬「農業立國の根本義」『国家と農業』『横井博士全集』第8巻, 232頁。
- 27) 河上肇『日本尊農論』『明治大正農政経済名著集』第3巻, 農山漁村文化協会, 1977年, 41頁（初出1905年）。
- 28) 河上肇『日本農政学』同文館, 1906年, 176-196頁。
- 29) 同上, 121頁。
- 30) 『農業本論』は、札幌農学校の学内誌『恵林』に投稿したものに、離職後、健康状態悪化のため、口述筆記により追加補正し、まとめられたものである。
- 31) 貴農説を唱える理由として主観的貴農説と客観的貴農説がある。前者は、抽象的・感情的・観念的に農を尊重するというものであり、後者は具体的に社会に及ぼす影響を考え、統計その他の事実を集め、経済の原則に照らして、農業と農民を尊ぶものである。新渡戸の立場は後者である。『全集』第2巻, 481頁参照。
- 32) 『農業本論』539頁。
- 33) 同上, 540頁。
- 34) 同上, 537-538頁。
- 35) 同上, 515頁。
- 36) 同上, 303頁。
- 37) 同上, 410-411頁。新渡戸は膨張説を論じる際、帝国主義という語も併用している。しかし、ここで新渡戸の言う帝国主義とは20世紀に入ってから本格化する帝国主義とは異なるもので、膨張説、拡大説という語を使用した方が新渡戸の真意に近いと思われる。
- 38) 同上, 412頁。
- 39) 同上, 525頁。
- 40) 同上, 492頁。
- 41) 同上, 284頁。
- 42) 同上, 394頁。
- 43) 同上, 248-252頁。

- 44) 新渡戸の社交主義は、その思想の核心をなすものであった。1906年、一高校長就任演説で新渡戸は、clear head, clear heart, socialityの3つの標語を掲げた。籠城主義に傾いていた当時の一高生に sociality (社交主義) を強調したことは新たな人間変革を迫るものであった。
- 45) 同上, 503頁。
- 46) 『農業本論』第9章は「農業と地文」について説いている。地文とは現代の自然地理学に相当するもので、農業の盛衰が気象、地質に及ぼす影響を指摘している。例えば、伐木が砂漠化を招き、灌漑が温度を調節する等、人間の農業労働が気象条件にまで影響を与えてしまうというものである。環境に応じて作物を植えるという受動的な観点だけで農業を捉えるのではなく、創意工夫を以て能動的に人間が自然界に働きかけるべきであると新渡戸は考えていた。地球上の土地は肥料を加えて土壤を維持すると、長期間耕作可能であるが、そういう努力を怠ると自然破壊につながる危険性がある。殺土農(land killer)という激しい語を第9章では用いており、人間の主体性と責任という視点から農業を論じている。第9章は新渡戸の視野の広さがうかがわれる章であるが、他の章と比べると異質な感じを受けるため、今までの新渡戸研究では軽視される傾向にあった。
- 47) 『農業発達史』『全集』第2巻, 685-687頁。
- 48) 佐谷眞木人『民俗学・台湾・国際連盟(柳田國男と新渡戸稲造)』講談社, 2015年, 71頁。
- 49) 三層構造は『武士道』の骨組みから読みとられるものであるが、山本博文氏は図で示している。山本博文『武士道』NHK出版, 2012年, 39頁参照。
- 50) 勤勉に関しては、『農業本論』第7章「農業と風俗人情」に詳しい。この章は理想的な農民像と実際の農民像の乖離をテーマにしている。新渡戸の農民に対する厳しい叱責の文章が続き、多くの新渡戸研究者を驚かせた。
- 51) 『農業本論』320頁。
- 52) 農民が進取の気象に乏しいことは『農業本論』第8章に記されている(409頁)。この章との関連で、第3章では「農学に於ける学理の応用」について言及されている。その第2項に農学がいかに実地に応用されるのが難しいかを19の観点から論じており、その筆頭に「農民は頑冥固陋にして新案を喜ばず」と記している。13番目には、「学者と実用家とに懸隔ある事」をあげている。学者は農民が持っている古き慣習を重んじ、農民も学者の説を信じなければ両者はいつまでも接点を持つことができず、農業は時流に乗り遅れることになるかと警鐘を鳴らしている。この19の観点は、農学の立場に立つ新渡戸が、農民の側に立って物を考えているという点で興味深い。第8章の前提の章として第3章の学理的分析がある。
- 53) 新渡戸稲造『自由の真髓』鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波文庫, 2007年, 206頁。
- 54) 同上, 209頁。
- 55) 「新自由主義」『内観外望』『全集』第6巻, 209頁(初出1933年)。
- 56) 「野暴しと落穂拾ひ」『農業本論』350-354頁。
- 57) 「境界の争」同上, 354-357頁。
- 58) 宗教に関しては『農業本論』第7章参照。
- 59) 『グスタフ・シュモラー研究』93頁。
- 60) 『ウイリアム・ベン伝』『全集』第3巻, 615-616頁。
- 61) 鳥居清治「新渡戸稲造と協同組合運動」『新渡戸稲造研究』創刊号, 新渡戸稲造会, 105-150頁。
- 62) 『日本土地制度論』127頁。

[たにぐち みのる 横浜国立大学大学院国際社会科学府博士課程後期]